

# 女の身体に認められる不利な点

——ブツダになる準備をする上での障害——

小林 信彦\*

## A

「女の身体のままではブツダになれない」というのが仏教世界での常識である。そして、「心を備えた生きものは、いつかブツダになる可能性がある」というのがマハーヤーナ (mahāyāna/大乘) の基本命題である。今たまたま女の身体をとっていても、「轉生」を重ねて行くうちに、いつかは男の身体をとってブツダになることができる。

もっとも、男の身体をとりさえすればよいというわけではなく、勇敢で賢い男の身体をとらなければならない。『スヴァルナバーソッタマ』(金光明經)で、「すべての女は常に勇猛果敢で賢く学のある男子となれ」と言われている (*Suvarṇabhāṣottamasūtra*, ed. Nobel, 3.92)。せっかく男になっても、臆病であったり知能が低かったり学問がなかったりすると、ブツダになる準備に支障をきたすのである。

『八千の詩節から成るプラジュニャパーラミター』(八千頌般若)では、シャーキャ・ブツダ (śākya-buddha/釋迦佛) が登場して、ガンガデーヴィー (gāṅgadevī) という女の未来について予言する (*Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitā*, ed. Mitra, 352-368)。それによると、死んだ後にガンガデーヴィーは何度も生まれ変わり、次々といろいろな「ブツダの国」(buddha-kṣetra/佛國

---

\*本学文学部

キーワード：女の身体、ブツダになること、轉生、阿閼仏国經、眞実の陳述

土)に男として生まれ、最後には「スヴァルナプシュパ」(suvarṇapuṣpa)という名前のブツダになる (ibid., 366)。こうして、今は女の身体をとっていても、ガンガデーヴィーは来世に男の身体をとり、いつか必ずブツダになるのである。

このように、「轉生」を繰り返していれば、そのうちにブツダになる可能性がある。しかしながら、女の身体のままですぐブツダになれるわけではない。「心を備えた生きものは、いつかブツダになる可能性がある」とは言われているが、「誰でも今の身体のままですぐ無条件にブツダになれる」などと言われているわけではない。ブツダになるには、それ相当の準備が必要である。そして、この準備を進めるには、それ相当の条件が整わなければならない。

## B

さて、『マツジマ・ニカーヤ』に収められた説話では、いったん「嫌な行き先」(aniṣṭa-gati/悪趣)へ行ってしまった「心」(vijñāna/識)は、人間の身体に移るのが絶望的に難しいと言われている (*Majjhimanikāya*, 129, Bālapaṇḍita-sutta, ed. Trenckner, 3, 169)。人間以外の動物の身体に留まっていたは、「善い行い」(śubha-karman/善業)をする機会がないからである (loc. cit.)。そして、たとえ人間の身体に移ることがあっても、貧乏人や身分の卑しい者として生まれたり、病気や障害があつたりすると、「善い行い」がしにくいと言われる (ibid., 170)。

人間の身体は「望ましい行き先」(iṣṭa-gati/善趣)と見なされているのであるが、条件がすべて同じというわけではなく、金持ちや身分の高い者の身体は、ブツダになる準備をする上で有利と考えられている。貧乏をしていたり身分が低いと、生きるのが精一杯で、ブツダになる準備に専念するゆとりがないからである。同じように不利な「行き先」として、身障者や女の身体がある。

『パーイシャジャグル・スートラ』(薬師經)によると、障害者や女はブツ

## 女の身体に認められる不利な点

ダになる準備がしにくいという (*Bhaiṣajyagurusūtra*, ed. Dutt, 5)。ブツダの教えを学ぶにも、「善い行い」に従事するにも、身体障害者は不利であるが、それと同じように女も不利である。このように、ブツダになる準備の妨げとなるのは、身体上の条件である。

女であること (*stri-bhāva*) は、女に特有の不利な点 (*stri-doṣa*) ゆえに苦しみを伴い、厭うべきであるが、それを捨てたいと願っている女が私の名前を心に浮かべるなら、最終的に真理を会得するまで女でないように、そのように私はするつもりだ (*loc. cit.*)。

これがパーイシャジャグルの第8の「決心」 (*praṇidhāna*/誓願) である。仏教の教えによると、「心」は身体の死を越えて果てしなく存続し、取り替えができない。したがって、捨てるべき「女であること」は、身体に限られる。そうすると、ここで言う「女に特有の不利な点」は、身体の機能に認められることになる。

「最終的に真理を会得するまで女でないように」 (*na stribhāvo bhaved yāva bodhiparyavasānam*) という表現から明らかなように、「不利な点」 (*doṣa*) の多い女の身体をとらせないようにするのは、男として愉快的な人生を送らせるためではなく、女の身体では困難な大事業、すなわちブツダになるための準備を効率的に進めさせるためである。

ブツダになろうという決心 (*cittotpāda*/發心) をしてからブツダになるまでに、 $3 \times 10^{51}$ カルパ (*try-asamkhyā-kalpa*/三阿僧祇劫) にわたって頑張り続けなければならない。これは $38.4 \times 10^{50}$ 年に相当する。『パーイシャジャグル・スートラ』の記述は、この途方もない時間の経過を前提にしたものであり、「轉生」を繰り返して果てしなく続く「心」を視野に入れている。したがって、最終的な真理の会得に先立って、一兆年ほど男の身体をとらせれば、公約は立派に果たされるわけであり、「超能力を使って、生きている間に男に変身させてやろう」というような話ではない。

C

『阿閼佛國經』では、「諸の〔阿閼佛刹の〕妊身の女人、皆安隱に産む」（『大正』11, 753.c.9）と言われ、「阿閼佛刹の女人、妊身となり、産む時、身、疲極せず」（756.b.11-12）と言われる。また、「亦、臭処、悪露有ること無し」（b.13-14）と言って、女の身体に特有の不利条件が消滅した状態、女にとって望ましい状態に言及する。アクショービヤ（akṣobhya/阿閼）の国へ行きさえすれば、女の身体に特有の苦痛と不快が消滅するのである。そして、この文献のチベット語訳（*de-bshin-gśegs-pa mi-hkhrugs-pahi bkod-pa*）には、「アクショービヤの国へ行かない限り、月経の不快さから逃れることができない」という言葉が見られるのである（Dantinne, *La splendeur de l'inébranlable*, 97）。

『阿閼佛國經』では、「諸の阿閼佛刹の妊身の女人、皆安隱に産む」に続いて、「盲者、見るを得。聾者、聴くを得」とある（753）。妊娠して子供を生むことは、身体障害と併置されている。ブツダを目指す人々にとって理想の環境であるアクショービヤの国には、このような障害がなく、女たちは心置きなくブツダになる準備に集中できる。「妊娠して子供を産むことは、視覚障害や聴覚障害と同じように、ブツダになる準備をする上で障害となる」と考えられているのである。この世で女の身体をとった場合は、この障害から逃れることができず、ブツダになる準備をすることはかなり困難である。

『阿閼佛國經』に見られるような記述は、中国語で伝えられる仏典『轉女身經』にもあり、妊娠中と出産時に女の身体に加えられる苦痛に言及している。

於九月中懷子在身 衆患非一 及其生時 受大苦痛 命不自保 是故 女人應生厭離女人之身（『大正』14, 919.b.5-7）

九このつき月うちの中に子はらを懷みて身に在れば、衆患、一に非ず。其の生るる時に及べば、大苦痛を受け、命も自ら保たず。是の故に、女人、應に女人の身に厭離を生ずべし。

## 女の身体に認められる不利な点

女には日常に感じる不快があり、月経や妊娠や出産に味わう苦しみがある。これが「女に特有の不利な点」であり、ブツダになる準備を進めるのに大きな障害となる。悪阻でひどく苦しんでいたり、出産で疲労困憊しては、はるか遠い未来の目標を目指して努力する気にはなるまい。

## D

さて、出産に繋がる生理現象は、仏教史の非常に古い時代から「女に特有の苦しみ」(mātugāmassa āvenikāni duḥkhāni) と考えられていた。パーリ文献『サンユッタ・ニカーヤ』には、「男にない苦しみ」が五つ挙げられているが、そのうちの三つが月経と妊娠と出産である (Samyuttanikāya 37.1.3, 4, 239)。ちなみに、後の二つは「若くして親元を離れること」と「男に仕えること」である。身体にかかわりのない二つの「苦しみ」は、ブツダになる準備に障害となると見なされることがない。

このように、女に特有の不利条件と考えられているのは、すべて身体にかかわるものであり、心に帰せられるべき人格的欠陥は視野にない。なお、女の「煩悩」について、『轉女身經』など、中国語で伝えられる文献に記述が見られるが、やはりこれも身体の機能に帰せられ、女の身体に寄生する虫が原因であるという。

女人身過者 所謂欲瞋癡心 并餘煩惱 重〔於〕男子 又此身中有一百戸虫 恒爲苦患愁惱因緣 是故 女人煩惱偏重 (『大正』14, 919.a.27-b.1)

女人の身の過ひとは、所謂、欲瞋癡心、並びに餘の煩惱、男子より重し。又、此の身の中に一百の戸虫<sup>こちゅう</sup>有りて、恒に苦患愁惱の因緣と爲る。是の故に、女人は煩惱偏に重し。

合成語「戸虫」の前分「戸」は、「出入りのできる空洞」/「穴」を指す (『禮記』「月令」: 蟄蟲咸動 啓戸 始出: 『疎』: 戸 謂穴也)。5世紀初頭に長安にやって来たブツダバドラ (buddhabhadra/佛陀拔陀羅) が訳した『達磨多羅禪經』によると、人間の体内には8万の「戸」があり、虫が生息して

いるという（『大正』15, 315.c.14: 身内侵食蟲 戸有八十千）。また、宋時代に訳された『治禪病祕要法』によると、人間の臓器の中には8万匹の「戸蟲」が寄生していて、病気の原因となっているという（『大正』15, 334.b.15, 335.c.12, 336.a.2, 5）。『轉女身經』によると、このうちの100匹が女の苦しみの原因となっていて、そのせいで女の「煩惱」は特にひどいというのである。

盲や聾の身体をしていては、ブッダになる準備をするのに不利である。視覚器官や聴覚器官に欠陥があるので、ブッダの教えを学ぶことが困難であるし、「善い行い」に従事することも容易でない。それと同じように、女の身体をしていると、「女に特有の不利な点」ゆえに、ブッダを目指して頑張るのに都合が悪い。

これは純粹に生物学上の問題であり、この点をはっきりさせるために、「女が就いた前例のない五つの地位」に言及する際に、鳩摩羅什も法護も“stri”（女）を「女人身」と訳して、ことさら「身」を加えている。そして以後も、「女人成佛」が問題になるたびに中国人は努めて「身」を加えている。ちなみに、日本語の「み」と違って、中国語の「身」は「身の上」/「境遇」という意味を表すことがない。

## E

さて、『ヨーガーチャラ・ブーミ』（瑜伽師地論）は、4-5世紀のインドで成立した文献であり、唯識学派（vijñānavādin）の基本書としてよく知られている。この文献の中核を成すのは、遠い未来にブッダになろうと志す者がぜひとも行わなければならない「ボーディサットヴァの活動」（bodhisattva-caryā/菩薩行）の記述である。

この問題に関連して、「男であることへの愛着」と「女であることへの嫌悪」とが、ブッダになるための条件を整える要因の一つとして挙げられている。「男であること」（manuṣyatva）とは、「男の生殖器官を備えていること」（manuṣyendriya-samanvāgama）である。さらに、男の身体は苦痛が

## 女の身体に認められる不利な点

少なく、病気になりにくく、頑張りがきき、力に溢れているという (*Yogācārabhūmi*, ed. Wogihara, 29)。

このように、男または女であることは、道德上の優越とは関係がなく、身体機能の問題にすぎないのである。ブツダになるには  $3 \times 10^{51}$  カルパ、すなわち  $38.4 \times 10^{59}$  年 ( $3 \times 10^{51} \times 12.8 \times 10^8$  年) を要すると言われるが、ブツダを目指して準備を続けるボーディサツトヴァは、その三分の一 ( $12.8 \times 10^{59}$  年) が経過した時点で、女の身体を取ることがないという (*ibid.*, 94)。

悪いことや善いことをするのも、その報いとして苦しみや楽しみを経験するのも「心」であって、その際に身体は道具として用いられるにすぎない。身体の一部である感覚器官がなければ、悪いことや善いことを実践できないし、苦しみや楽しみを経験することはできないのである。

「行い」(karman/業)の主体は「心」であって身体ではない。「轉生」を繰り返すのも、ブツダになるのも、「心」であって身体ではない。ただ、「心」は単独では存在することができず、収納装置としての身体が常に必要である。このように、「心」にとって、身体は道具または収納装置にすぎない。身体の死に影響されることなく、「心」は「轉生」を続け、異なる種や性の身体を通過するのである。

さて、「男であること」とは、「男の生殖器官を備えていること」である。性別はもっぱら身体にかかわることであり、「心」にかかわりはない。身体が男であったり女であったりすることはあっても、「心」が男であったり女であったりすることはない。したがって、男または女の身体が「轉生」したりブツダになったりするのではない。ブツダになるかどうかという問題が取り上げられるのは、身体に収納されている「心」についてである。

## F

今たまたま不利な身体をとっていても、「轉生」を重ねて行くうちに、いつかは有利な身体をとって、心行くまで準備に専念し、遠い未来にブツダになることができる。もしそうでないなら、過去に一度でも女として生まれた

ことがあれば、たとえ「轉生」を繰り返して何回も男として生まれても、ブツダになる見込みはないことになろう。

「一度でも女に生まれたことがあれば、未来永劫にブツダになれない」などという記述は、仏教文献のどこにも見られない。そして、逆の話ならいくらでもある。例えば、『サツダルマ・プンダリーカ』(saddharmapuṇḍarīka/法華經)の第12章では、シャーキャ・ブツダが登場して、一万人もの女に向かって「お前たちは必ずブツダになれる」と予言している(268-270)。この女たちを引き連れているのは、シャーキャ・ブツダを育てた伯母ゴータミー(gotamī)と元の妻ヤショダラー(yaśodharā)であるが、一万人もの女をまとめて面倒を見ているのであるから、身内だけを特別扱いしたわけではない。

もっとも、「一万人の女に予言をする話」の直前に、この一般常識に反するかに見える話が伝えられている。ナーガ(nāga)の国の王サーガラ(sāgara)には10歳の娘がいて、『サツダルマ・プンダリーカ』の教えを聞くと、直ちに究極の真理を会得してブツダになった。シャーキャ・ブツダの弟子シャーリプトラ(sāriputra)は「女の身体をしたままブツダになるはずがない」と疑うのであるが、実はブツダになったサーガラの娘には性転換が起こっていた。

一万人の女がブツダになると保障されたとしても、それが実現するのは気が遠くなるような遙か未来のことである。ところが、サーガラの娘の場合だけは、『サツダルマ・プンダリーカ』の威力があまりにも桁外れであったので、「轉生」を繰り返す間もないまま、ブツダになるための条件が整ってしまい、その一環として「男の器官」が現れた。

『サツダルマ・プンダリーカ』にサーガラの娘のエピソードが導入されたのは、「女が究極の真理を会得するためには、性転換が必須の条件である」という一般命題を打ち出すためではない。そして、「究極の真理を会得する上で、女であることは決定的に不利である」という通念がもともと仏教コミュニティにあったにしても、女がブツダになる可能性を否定しなければな

## 女の身体に認められる不利な点

らない原則が仏教の体系にあったわけではない。何しろ「心を備えた存在」(sattva/有情)でありさえすれば、すべてのものにブツダになる可能性が認められているのである。

ただし、虫や魚にブツダになる可能性があるにしても、虫や魚のままではブツダになれない。真理を学ぶに十分な脳を備えていないし、手足がなければ他人のために尽くすこともままならないであろう。「人間以外の動物」の身体は、ブツダになる準備をする上で重大な支障である。3×10<sup>51</sup>カルパも準備期間の最後最終段階で、ラスト・スパートをきかせるべき時に、虫や魚のように支障ある身体では何ともならない。ゴキブリやシーラカンスがある日突然ブツダになるようなことはないのである。

ゴキブリやシーラカンスにもブツダになる可能性が潜在するにしても、それが実現するためには、いつか「心」が人間の身体に移らなければならないのである。同じように、女の身体をしたままではブツダになれないとすれば、いつか「心」が男の身体に移らなければならない。

今はゴキブリの身体をとっていても、限りなく生まれ変わっているうちに、ブツダになる準備がしやすい条件を整えばよい。ゴキブリの雄に宿っている「心」と同じように、人間の女に宿る「心」も、いつかはブツダになることができる。そのうちに立派な男として生まれて来ればよいのであり、今の時点で焦ることはない。

それに、ブツダになろうと決心したところで、実際にブツダになるには、38.4×10<sup>50</sup>年もの長い時間をかけて努力を重ねなければならないのである。仏教を信じている者なら、男であれ女であれ、今の人生や次の人生でブツダになれるなどとは思っていない。そして、この点については出家者も同じである。

したがって、「女の身体のままブツダになることができるかどうか」という問題は、「ゴキブリの身体のままブツダになることができるか」という問題と同じように、かつて仏教世界で議論が分かれることはなかった。38.4×10<sup>50</sup>年もの長い猶予が与えられているのであるから、今たまたま女の

身体をしているからといって、どうということはないのである。

G

サーガラの娘のエピソードは、ブッダになる速度があまりにも高いことに要点がある。『サッダルマ・プンダリーカ』は未曾有の経典であり、その教えを聞いたサーガラの子は、大乘仏教の通念を破る超高速度で究極の真理を会得した。生まれ変わる間がないどころか、成人する間もないのである。

ところで、仏教の伝承では、女の身体のままではブッダになれないことになっている。そうすると、超高速度で女がブッダになる筋書きを貫徹させるためには、生きたままで男にならなければならない。すなわち、身体の一部をそのままにして、生殖器官だけを取り替えなければならない。

さて、『ディヴィヤ・アヴァダーナ』の「ルーパーヴァティーの話」では、自分の乳房を他人に与えた女に性転換が起こる。器量良しで知られるルーパーヴァティー (rūpavati) は、飢えに苦しんで自分の子供を食おうとしていた女に出会い、自分の乳房を二つとも切り取って食わせた (*Divyāvadāna*, ed. Cowell, 473-474)。

このように極端な「善い行い」は、必ずしもブッダになることを目指して行われるとは限らず、天国での享樂を目指して行われたのかも知れない。この点をインドラ (indra) に疑われたルーパーヴァティーは、ブッダになりたいという気持ちに偽りは無いことを誓って「真実の言葉」(satya-vacana) を発する。すると、生殖器官の入れ替えが起こって、疑っていたインドラは納得する。

また、中国語訳で残る仏教文献には、性転換の直後に「ブッダの予言」(vyākaraṇa/記) が与えられる話を伝えるものがある。「お前は遠い未来に必ずブッダになる」と言って、シャーキャ・ブッダ自身が保証を与えるのである。

『佛説竜施女經』では、ナーガダッタ (nāgadatta/龍施) という14歳の娘がブッダになろうと決心すると、マーラ (māra/魔羅) が父親の姿で現れ、

## 女の身体に認められる不利な点

「女はブッダになれない」と言う。娘はこれを信ぜず、高樓から跳び降りて身体をブッダに捧げようとした。落下の途中で男の身体に変わり、着地後に「ブッダの予言」を授けられ、遠い未来にブッダになることが決まった（『大正』, 14, 910.a.9-16）。

『六度集經』では、「ブッダの予言」を求めた女が性転換を勧められ、高樓から身を投げる。着地の瞬間に男に変わり、いつか「ブッダの予言」が授けられるであろうと予言される（『大正』, 3, 38.c-29.a）。

## H

女の身体のままでは、その生物学的な不利ゆえに、ブッダになる準備がしにくい。ブッダになるのなら、いずれ男として「轉生」すればよいのであるが、ブッダになる意志が異常に強い場合、「轉生」のプロセスが瞬時に凝縮されて性転換が起こる。そして、性転換という奇跡が引き起こされた根拠は、「真実の陳述」に求められる。

ブッダになる意欲が異常に強い女がいて、自分の真意をぜひとも理解させたいと思い詰め、ある種の言葉を発すると、突如として性転換の奇跡が起こるのである。ルーパーヴァティーの場合は、「私は王国を求めています」に始まる五項目の誓いがこれであり、この言葉が発せられた直後に女の生殖器官が消えて、男の生殖器官が現れる。

古いインドの文学では、一挙に苦境から抜け出すために奇跡を起こす手段として、「真実の陳述」が行われることがある。自分の思いに嘘偽りがないことを厳かに誓うと、奇跡的な場面転換が起こり、当人は苦境を脱するのである。最もよく知られているのは、『ナラの物語』の一場面である。婿選びの式に出た王女ダマヤンティー (damayantī) は、ナラ (nala) を夫に選ぶとするが、ナラに化けた四人の神がナラの側に立ったので、どれがナラか分からない。困り果てたダマヤンティーは、ナラに対する自分の愛に偽りがないと宣言する。すると、神々は元の姿に戻り、ダマヤンティーは思いどおりにナラを選ぶことができた (*Mahābhārata*, ed. BORI, 3.54)。

仏教文献『マハーヴァストゥ』では、「真実の陳述」によって、毒矢で殺された少年苦行者が生き返る (*Mahāvastu*, ed. Senart, 2.218.15 ff.). また、中国語訳で伝わる『腹中女聴經』では、母親の胎内にいる女の胎児がブツダと問答をし、出産の際に「我、菩提心を発して男子と成るを願ふ。我、男子の身を得ずば、終に立たじ」と言う (『大正』, 14, 914.c.26)。そして、この「真実の陳述」によって、男の身体を得たのである。

さて、シャーリプトラに疑われたサーガラの子は、「私にすでに超自然力が備わっていましたら、たちまちのうちにブツダになることができますよ」と言う (*Saddharmapuṇḍarīkasūtra*, ed. Nanjio & Kern, 265)。この言葉は「嘘いつわりなく私にはすでに超自然力が備わっています」という気持ちを仮定表現で表わしたものである。

法護の『正法蓮華經』を見ると、「私にすでに超自然力が備わっていましたら、たちまちのうちにブツダになることができますよ」というサーガラの娘の台詞は、仮定表現を避けて「今我取無上正眞道成最正覺 速疾於斯」(今、我、無上正眞道を取り最正覺を成ずること、斯より速疾なり) と訳されている (『大正』9, 104.a.19-20)。代名詞「斯」が指すのは、「娘の差し出した宝石をブツダが受け取る速度」である。シャーリプトラに疑われたサーガラの娘は、自分に超能力がすでに備わっていることを宣言しているのである。

この言葉が「真実の陳述」となって、とんでもない奇跡が起こり、直ちに女の生殖器官が消えて、男の生殖器官が現れるたである。『サッダルマ・プンダリーカ』を教わって、サーガラの娘はすでに超自然力を備えていた。したがって、このような途方もない大奇跡を引き起こしたのは、超自然力の備わった言葉である。

なお、鳩摩羅什の中国語訳文では、サーガラの娘の台詞が「以汝神力觀我成佛 復速於此」(汝の神力を以て、我が成佛、また此れより速かなると觀よ) となっている (『大正』9, 33.c.15-16)。しかしながら、鳩摩羅什はここでいささか脱線している。「此れより速かなるを觀よ」と他人の行動を促

## 女の身体に認められる不利な点

す文では、自分にかかわる「真実の陳述」に転換しようがない。それに、サーガラ（Sārāla）の娘がブツダになる様子は、多くの人々が見ているのであるから、シャーリプトラ側（Śālikaputra）の「神力」など必要ではないのである。

### I

「真実の陳述」の直後に奇跡が起こるのは、人物も状況もただならぬ場合に限られている。王女のダマヤンティーはナラと結婚しようと思いつめていて、主婦のルーパーヴァティーはブツダになろうと思いつめていて。思いつめた結果、ある種の超自然力が備わったらしい。少なくとも、その場にいる神などの超自然存在を説得できる力が備わっているのである。

仏教文献に描かれる性転換は、当人が「真実の陳述」をした後に起こるとは限らず、ブツダの予言によって起こることもある。女に向かってブツダが言葉を発して、「お前は遠い未来に必ずブツダになる」と予言する場合には、性転換がよく起こるのである。例えば、『賢愚経』の「難陀の話」では、乞食女がわずかな金で油を買い、せつせとブツダに捧げているうちに、「予言」を授けられた。そして、それを聞いた女に性転換が起こった。

聞佛授記 歡喜發中 化成男子（『大正』4, 371.c.15-16）

佛の授記を聞き、歡喜のおこ發る中に 男子に化成す。

誰かがブツダになると告げるシャーキャ・ブツダの言葉には超自然力が備わっていて、性転換を引き起こすらしい。超自然力を宿す音声とも言うべきダーラニー（dhāraṇī/陀羅尼）を奇跡の根拠とする場合もある（*Ratnaketus-ūtra*, ed. Dutt, 38-39）。性転換という奇跡を引き起こす根拠とされるのは、何かの超自然力が宿る言葉であり、平凡な状況で平凡な人物が発した言葉では、このような奇跡が起こらない。ただし、異常な状況で「真実の陳述」を行う場合は特別であり、平凡な人物が発した言葉も性転換を起こすことができる。

さて、言うまでもなく、男の生殖器官さえ付けば直ちにブツダになれるわけではない。これは必要条件ではあっても、十分条件ではないのである。ルー

パーヴァティーの場合は、男に変わってから望まれて王になり、その後は二回続けて男として生まれ変わり、そのつど自分の身体を鳥や虎に与えて死ぬ。こうして、ブッダになる準備を着々と進める。

このように、思い詰めた女に性転換が起こったからといって、すぐにブッダになれるわけではない。生殖器官入れ替えの話は、「いつか女がブッダになること」の例証とはなっても、「直ちに女がブッダになること」の例証とはならない。男の生殖器官が付きさえすればよいなら、この世の男たちは全てすでにブッダになっているであろう。

J

仏教を信じている人々の間では、生きている間にブッダになろうとする女はいないし、生きている間に女がブッダになることを期待する男もない。仏教世界では、「女がブッダになれるかどうか」という問題に対して、明確な解答が用意されている。このことに関連して、約束事がいくつかあるからである。

A: 身体の死にかかわらず、「心」は存続する。

B: 「心」を備えたものは、ブッダになる可能性がある。

C: 女の身体をとったままではブッダになれない。

「心」を備えた存在（動物）なら、いつかブッダになる可能性があり（B）、今の生存形態がどんなものであろうと、この可能性が取り消されることはない。未来にブッダになる可能性については、今の生存形態に制限はないのである。しかしながら、ブッダになる時点での生存形態には制限がある。ゴキブリやネコなど、人間以外の動物の身体に「心」が収まっている時には、ブッダになれないのである。

そして、人間の身体でありさえすればよいというわけではなく、不利な点がある場合は、やはりブッダになれない。不利な点のある身体として、身体障害者や癲病患者や精神障害者と並んで、女の身体が挙げられる（C）。出産につながる生理現象が不利な条件と認められるからである。しかしながら、

## 女の身体に認められる不利な点

たまたま今の身体に不利な点があっても、「心」が死を越えて存続するのであるから (A)、ブツダになる可能性は依然として保持される (B)。

ブツダになる準備をする上で、女の身体は不利な点があるのは確かであるが、出産に関連する不利や相対的に低い体力ゆえの不利であり、男の身体と女の身体との差は、それほど決定的なものではない。体力があるだけに暴力沙汰を起こす可能性があることを考えれば、男の身体は必ずしも有利とはいえなからう。ブツダになる見込みという点で、今たまたま女の身体に収まっている「心」と今たまたま男の身体に収まっている「心」の間に、ほとんど変わりがないであろう。

## K

「すべての人間と動物にはブツダになる可能性がある」と言われる。これは身体ではなく「心」について言われたことである。ゴキブリのままでブツダになることができるということではなく、人間の身体に移ってブツダになることができるということである。ゴキブリの身体に収まっている「心」も、いつか人間の身体に移る機会がある。

ゴキブリの身体は「嫌な行き先」(aniṣṭa-gati/悪趣)であり、そこに収まっている限り、ブツダになる条件を満たすことはできない。人間の身体は「望ましい行き先」(iṣṭa-gati)であり、そこに収まっていると、ブツダになるための条件を満たすことが可能になる。ただし、同じ人間の身体でも、身障者や女の身体は「望ましい行き先」として完全ではなく、ブツダになるための準備をもっと効果的に行うには、もっと支障の少ない人間の身体に移らなければならない。

「望ましい行き先」として完全でないのは、健康に恵まれない人間や女の身体だけではない。それに、病気や障害が全くなく、「望ましい行き先」と見なされている神の身体も、ブツダになる準備をするのに必ずしも理想的とは言えない。「神々の世界」にはブツダがいないし、ブツダの教えを継承するサンガも存在しない。また、楽しすぎて「生きることは苦しみである」と

いうことを知るきっかけもない。「神々の世界」にはブツダになれないのである。ブツダになるには、「心」が人間の身体に移って、この世での生活を経験しなければならない。

「心」が女の身体に収まっている限り、ブツダになることはない (C)。しかしながら、時間は無限にあるのであるから (A)、今たまたま「心」が女の身体に収まっているとしても、慌てる必要は少しもない。いつかは必ずブツダになる可能性があるのであるから (B)、女の身体に収まっている今もそれなりに頑張り、そのうちに男の身体に移ればさらに拍車をかけて頑張ればよい。そして、ブツダになる瞬間に男の身体に収まっていればよいのである。こういうわけで、今「心」が女の身体に収まっても、何も心配することはなく、ゆっくり構えて努力を積み重ねればよい。今たまたま男の身体をとっているからといって、100兆年や1000兆年程度の短時間ではブツダになれないのである。

L

「サーガラの話」の直前にあるのは、「前世でシャーキャ・ブツダが『サツダルマ・プンダリーカ』を教わる話」である。前世でシャーキャ・ブツダは国王であったが、デーヴァダッタ (devadatta) の前身である苦行者に仕え、ついに『サツダルマ・プンダリーカ』を教わったという。そして、この経典の威力を例証する話として語られるのが「サーガラの話」である。その即効性はすさまじく、何千億回の「轉生」に要する時間は一瞬に凝縮されたのである。

前世のデーヴァダッタから教わった『サツダルマ・プンダリーカ』は、シャーキャ・ブツダの隠されていた真実を初めて明らかにする衝撃的な経典である。サーガラの話があれほど速くブツダになれたのは、生殖器官の入れ替えがあったからではなく、未曾有の経典『サツダルマ・プンダリーカ』を教わって、究極の真理を会得したからである。生殖器官の入れ替えは、真理会得と連動して起こった現象である。

## 女の身体に認められる不利な点

シャーリプトラの懐いた疑念は、「今たまたま女の身体をとっている以上、ブッダになるはずがない」という常識に基づいていた。そして、この疑念は生殖器官の入れ替えが起こったのを見て氷解した。ブッダになった瞬間にはもはや女の身体をとっていないのである。女の身体のままではブッダになれないという点では、サーガラの子も異論はない。小乗仏教を代表するシャーリプトラと大乘仏教を代表するサーガラの娘が争っているのではない。「サーガラの娘の話」の主旨は、女の身体をとったままブッダになれることを示すことにあるのではない。

普通なら「轉生」を繰り返しているうちに男の身体をとり、ブッダになるための身体的条件が整うのに非常に長い時間がかかるのであるが、この場合の特殊性は身体的条件の整うのに要した時間が異常に短いということである。果てしなく長いはずの準備期間が極めて短い時間に短縮されたのである。この異常な速度こそ、シャーリプトラが怪しんだ点であり、「サーガラの娘の話」のテーマである。そして、この異常な速度をもたらしたのが『サッダルマ・プンダリーカ』から得た超自然力であることを示すことこそ、この話の主旨である。

これほどまでに異常な事象が語られている場合にも、「ブッダを目指すのに、女の身体は不利である」という常識が破られないように、細かな工夫が凝らされている。この常識が伝えられている世界で問題にされるのは、生物学的な身体であって心ではない。

## The Female Body as Described in Buddhist Literature

Nobuhiko KOBAYASHI

The female body is said in the *Samyuttanikāya* to be handicapped by such physiological phenomena as menstruation, pregnancy and delivery, and Buddhists have a tradition that it is biologically unfavourable for becoming a buddha. So women have now difficulty in making preparations to become buddhas, but they do not have to worry about it, because their minds (*vijñāna*) can transfer far in the future to male bodies in the course of transmigration (*saṃsāra*). It is narrated in the *Aṣṭasāhasrikā-prajñāparāmitā* that a woman called Gaṅgadevī was repeatedly reborn as a man in various buddha-lands (*buddha-kṣetra*) and finally became a buddha called Suvarṇapuṣpa. Minds transfer to new bodies one after another regardless of species or sex. Male or female, bodies are no more than temporary containers.